

大麦の基肥一発肥料栽培での追肥による収量品質の確保

1 背景・目的

県内の大麦生産の施肥体系は、基肥一発肥料が広く普及しているが、冬期間の積雪日数や越冬後の気温の推移によっては、春季に窒素栄養供給不足になる恐れがある。そこで、一発肥料に越冬後の各生育期に追肥を行い、収量向上及び品質の維持に有効な追肥時期の検討を行う。

2 技術のポイント

- (1) 基肥一発肥料の消雪期から止葉展開期における窒素溶出量は分施肥体系と比べて不足気味に推移する傾向である(図1)。
- (2) 消雪期での莖数が700本/m²に満たない場合、消雪期に2kgN/10aの追肥をすることで穂数が増加し、増収の効果が高いが、700本を超える場合は追肥を行わなくても収量を確保できる(図2)。
- (3) 追肥の時期が遅くなるほど子実粗タンパク及び硝子率が高まりやすい(表)。
- (4) 以上より、消雪期時点の莖数が700本/m²より少ない場合、消雪期に2kgN/10aの追肥をすることで、子実品質を維持しつつ収量を確保することができる。

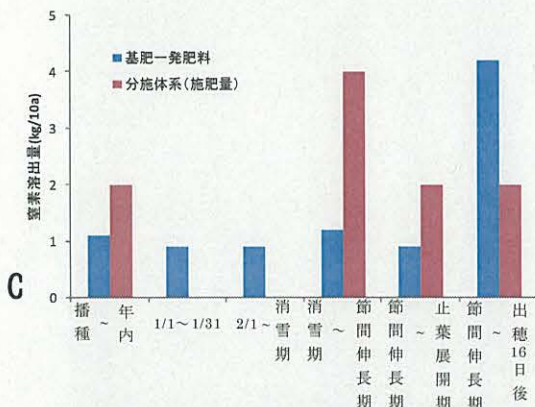
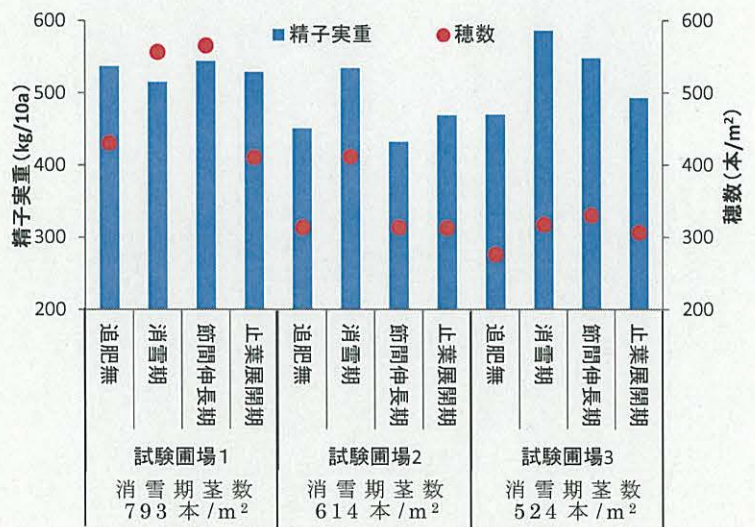


図1 窒素溶出量の推移

表 子実品質(3試験ほ場平均)

| 追肥の時期 | 子実粗タンパク(%) | 硝子率(%) |
|-------|------------|--------|
| 追肥無 | 7.0 | 22.0 |
| 消雪期 | 7.5 | 22.3 |
| 節間伸長期 | 7.5 | 23.3 |
| 止葉展開期 | 7.6 | 27.0 |



注1: 基肥一発肥料に加え、各生育期に1回のみ追肥(2kgN/10a)を実施

注2: 精子実重は粒厚2.4mm以上

図2 穂数及び精子実重

3 成果の活用と留意点

精麦用途の栽培に適用する。